園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年１月号

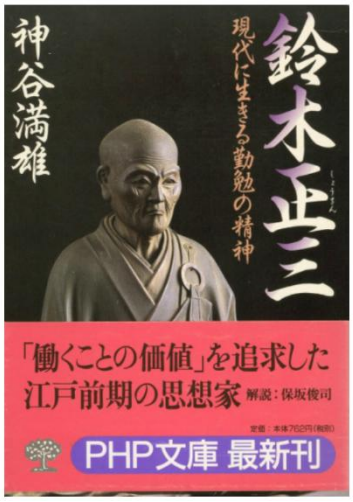
鈴木正三（すずきしょうさん）～日本近代化に最も大きな影響を与えた禅僧～

●私事にはなりますが、昨年から週末限定で、ミニバスケットボールチームのコーチ助手を始めることにしました。もちろんボランティアです。練習の見守りに加え、試合中はベンチに入ったり、練習試合では審判の真似事をしたりするようになりました。ほとんどバスケ素人の私が、まさかこの年で小学生に交じってコート内を全力で駆け回るようになるとは思いもしませんでしたが、保育園での子どもとの関わりとはまた違う発見が毎回あり、とても勉強になっています。

●そのミニバス全国大会の東京予選が今月から始まるのですが、この大会には「鈴木正三杯」というタイトルが付いています。私は初めてその名前を目にしたとき、自分の目を疑いました。というのも、「鈴木正三」とは、私が尊敬する江戸時代初期の禅僧と同姓同名だったからです。「禅僧とミニバスに一体どんな関係が…！？」と、興味津々で調べてみると、「鈴木正三（すずきしょうぞう）」は、「東京都バスケットボール協会」の元会長のお名前であり、禅僧の鈴木正三（すずきしょうさん）とは読み方も違う全くの別人であることが判明しました。（…そりゃそうだよね。）とは思いつつ、久しぶりに鈴木正三の名前に触れ、正三の足跡を学び直したいと思い立ち、年末、いくつかの文献を読み返してみました。すると、その思想はミル保育園の理念にかなり相通ずる部分がありましたので、新年最初のコラムでは鈴木正三（しょうさん）について取り上げたいと思います。

【鈴木正三の生い立ち～多感な少年時代～】

●正三は天正7(1579)年、三河の国の足助(あすけ)庄(現在の愛知県豊田市足助町)の地侍の家に長男として生まれました。時は戦国時代、領主である徳川家から年貢負担を免除される代わり、ひとたび戦があれば鈴木一族で馳せ参じるという武家の暮らしの中で育ちました。



●生と死が常に身近にある過酷な環境の中で育ったことも影響しているに違いありませんが、幼少年期の正三は、非常に聡明で多感だったことが次の2つのエピソードから伺い知れます。

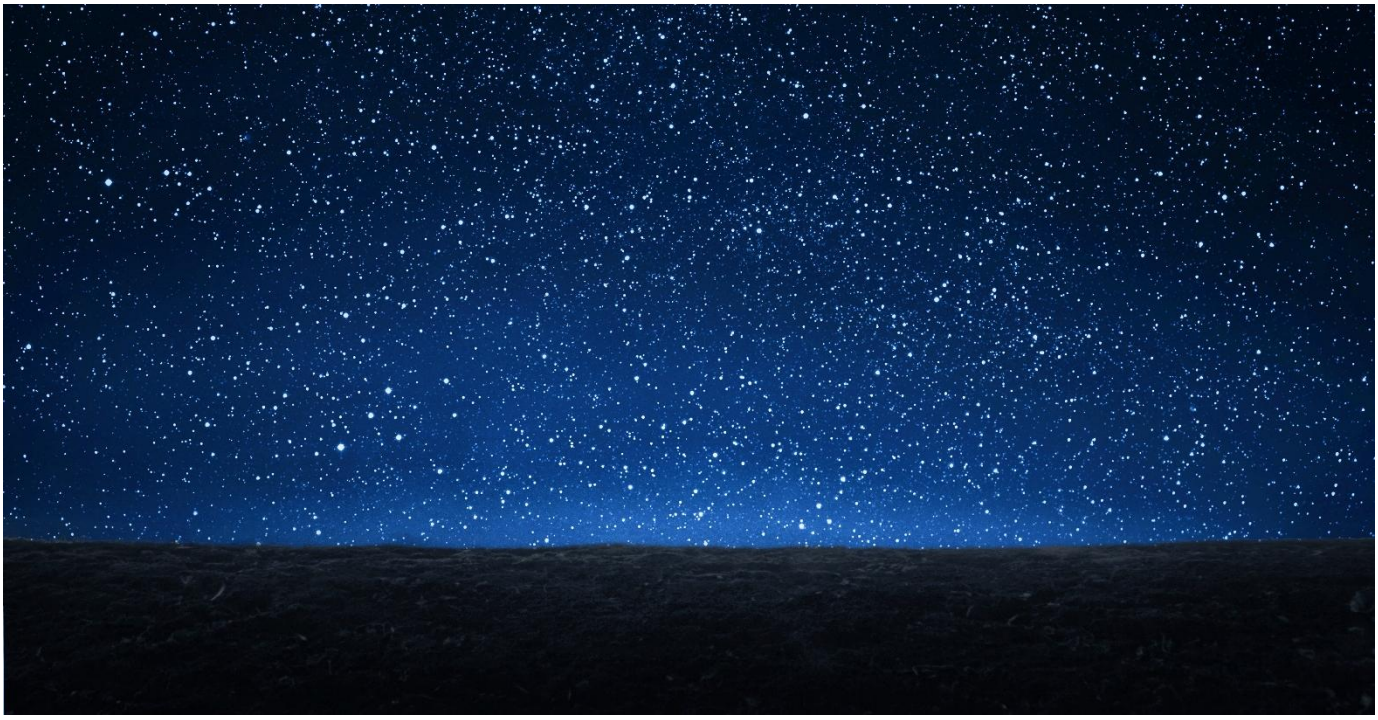
●一つ目は 4 歳の頃のこと。いつも遊んでいた同い年の従兄弟が突然病死してしまった際、周りの大人に対し真剣にこう問いかけたそうです。

「人間が死ぬとはどういうこと？あの子はどこにいっちゃったの？」

長年保育園で仕事をしていると、ペットや祖父母の死をきっかけに、一時的に死というものに対して強い恐れを抱いたり、敏感になったりする子どもの気持ちに向き合うことがありますが、正三もまさしく幼くしてこうした早熟な感性を持ち合わせていた多感な少年でした。

●もう一つは 12 歳の時のことです。ある日の夜も更けたころ、自宅の犬がしきりに吠えている。戸外へ出てみると、別に変わったこともない。その時、晴れた夜空を仰いで、正三はしみじみとこう言ったそうです。

「この空は平等で何ら差別することもなく広がっているのに、われわれ人間には、なぜ自己と他人、生と死というようなことがあるだろう。願わくは**自己と他人との対立を超越し、生と死の対立を打破**して、大自在の境地を得たい。そしてその導きとなる教えは仏法をおいて他にない。」



　正三が幼少期にどのような教育を受けたかの資料はありませんが、既にこの時点で武家の子でありながら平和を希求する思い、仏道に対する興味関心が高いことが伺い知れます。

【武士としての活躍から立志へ】

●慶長5(1600)年、22歳の正三は初陣として、関ヶ原の戦いを目指して中山道を進む徳川秀忠の軍に加わりました。さらに慶長19(1614)年、36歳の時には大坂冬の陣、翌年の夏の陣に参戦。この間、正三は数々の修羅場をくぐり武功を上げ、足助の庄の地に2百石を拝領する旗本に取り立てられました。大坂城警護などの任務が与えられましたが、これは当時の社会にあってはきわめて恵まれたエリートの地位であ

ったそうです。しかし、正三はその地位に安住することなくある一つの志を立てます。それは第2代将軍・秀忠を中心とする江戸幕府が築きつつあった「新しい平和な社会の建設に、自由な思想家として仏法をもって貢献していこう」というものです。

【実践～広く庶民に仏法を説く～】

●元和6(1620)年、正三は42歳にして、武士の身分を捨て、禅僧として出家します。二年ほど関西で学問や修行に励み郷里に戻ってきた正三は、初めは滝行や吹き晒しの洞窟で座禅を組むなど壮絶な荒行を敢行します。しかし途中で医者も見放すほどの大病を経験します。そこで

「人里離れ厳しい修行をして己一人悟りを開いたところでどうなるのだ。修めたことを庶民に広く説いてこそ真の仏道ではないか」

と強く思うようになり、以後77歳で生涯を終えるまで、武士や僧侶だけでなく、老若男女を問わず庶民の悩み相談にも広く応じたといいます。まさしく仏道の実践者でした。

【正三の著作】

●正三は仮名草子作家として人物事典で紹介されるほど、多数の著作を遺しています。





なかでも最初の著作である『盲安杖（もうあんじょう）』では、世の中に存在する「恩」には、天地の恩、師の恩、国王の恩、父母の恩と並んで「衆生の恩」もあると説いています。この衆生の恩とは「諸人が日常生活を営めるのも、農民が米を作ってくれたり、職人が衣服を作ってくれたり、商人がそれらを流通してくれるからであり、すべての仕事が互いに相助け合って世の中が成り立っている」というものです。これは前述の正三12歳の夜、満点の星空を仰ぎつぶやいた「自己と他人との対立を超越するには」に対するアンサーとも言えます。

●また、武士・農民・職人・商人それぞれが自らの職業にどう向き合うかについてまとめた「四民日用（のちに万民徳用）」では、「士農工商と職業こそ違えども、人はみな心中に仏性を持っているのであり、それぞれが自らの職業に打ち込むことで、その仏性を開発し、世のため人のために尽くせる」ということを説きました。修行は出家した僧侶の専業ではなく、万民が**日々自分に与えられた仕事に尽力しさえすれば、それがそのまま仏法修行**である、というのです。「士農工商」と聞くと、現代人はつい身分差別制度と結び付けてしまいがちですが、正三は、それぞれが異なる社会的な**役割**を持って社会を成り立たせていると考えていたことが、これらの著作を読むとよくわかります。

●以上、鈴木正三の足跡について本当に簡単に紹介させていただきましたが、私が正三の思想において最も共感できる点は次の3点です。

●まず1点目。武家という出自を持ちながら**あらゆる職業を**

平等視し、その違いは単に天から与えられた「役割」の違いだと考えていた点です。これは日本国憲法第22条で職業選択の自由が保障されている私たちはこれを更に発展させ、「職業」を「個性や特性」と言い換えられるのではないでしょうか。人はみな持って生まれた個性や特性が違うのは当然で、それぞれが自身の個性や特性を自覚し、努力し、伸びやかに発揮することこそがその人が天から与えられた役割であり、幸福につながる道であると、私は解釈します。これは、ふかさわミル保育園の「ミル(mill)」が「工房」に由来していること、すなわち、**熟練した家具職人や宮大工が材木の特徴や癖を見抜き、適材適所、唯一無二の家具や神社仏閣を世に生み出すかのように、保育者が子ども一人ひとりの個性や強みを見出し、認め、伸ばすお手伝いをしていきたいという保育園の創立理念に合致**します。

●2点目。仕事の報酬や結果に価値があるのではなく、ただ目の前の仕事に打ち込むこと自体が仏道修行そのものであり価値なのだという点です。

　ここで思い出されるのが、ノートルダム清心女子大学の理事長であった渡辺和子氏が若き日に一人の宣教師から贈られたという、ある有名な言葉です。

Bloom where God has planted you.
（置かれた場所で咲きなさい）

何をやるかではなく、それにどう取り組んだかが問われているという、厳しくも優しい言葉です。私はこの言葉が大好きなのですが、正三の思想と共通性を感じます。





●3点目は、「すべての仕事がお互いに相助け合って世の中が成り立っている」という**助け合いを重視している**点です。言い換えれば、**人間関係を上下で見ず、同じ仲間として捉え、仲間とのフラットな関係性が保たれることで、相互扶助が生まれ、組織における全体最適が実現する**ということです。

●ところでこのフラットな組織と言って私の頭に真っ先に思い浮かぶのが、ご存じアニメ「ONE　PIECE」における麦わら一味です。



●彼らには船長、航海士、船医など、一応役職らしきものはあっても上下関係が一切なく、個々が自由に動き回ることができます。戦局における役割に応じて、リーダーもコロコロ変わります。これは見方を変えるとメンバー全員が活躍できる場所を持っているということです。
●実際に現代社会において、組織構造も従来のピラミッド構造からフラット構造に変化しつつあることを感じます。それは「ONE　PIECE」が世界中でこれだけ読まれていること（全世界累計発行部数５億1000万部（2022年７月時点。世界ギネス記録））からも納得いきます。私はふかさわミル保育園の職員関係も、この麦わら一味のそれに近づけられたらいいなあと考えています。

●また、フラットな組織という点では、2025年10月に発足した高市政権もこれに当てはまるのではないでしょうか。無論政策の良し悪しについて論評できるだけの知見を私は持ち合わせていませんが、少なくとも報道から垣間見える高市政権のチームワークには好感が持てます。何よりも閣僚同士が明るく楽しげに談笑するシーンを見るとほっこりします。





（引用：いずれも YouTube ショート動画より）
●実際の中継映像を見ても、国会審議中居眠りをする閣僚

の姿はなく、皆一様に資料に目を落とし、相手の意見をメモしながら誠実に臨んでいる様子が見て取れます。
https://www.youtube.com/shorts/cIa10mWtslQ
まさにそれぞれが自分の役割を果たすべく、「働いて働いて…」を実践してくださっていると期待しています。

●2025年1月号の園だよりで、哲学者の森信三氏が「2025年に日本は再び甦る兆しを見せるであろう」との予言を遺していたことを紹介しましたが、私はこの度の高市政権の発足は、まさにその「兆し」だったのではないかと感じています。今お預かりしているお子様が社会に羽ばたく頃に日本が世界の真ん中で咲き誇れるよう、2026年も引き続き、明るい雰囲気が日本列島全体を覆い続けてくれることを祈るばかりです。そしてわがふかさわミル保育園にお通いのお子様にとっても、保護者様にとっても、職員にとっても、笑顔いっぱい明るく健やかな1年となりますよう目の前の仕事に尽力して参ります。引き続きご理解とご協力をお願い致します。

園長　橋本　英明

暗黒を嘆くより、一燈を点けましょう。
我々はまず我々の周囲の闇を照らす一燈になりましょう。
手の届く限り、至るところに燈明を供えましょう。
一人一燈なれば、万人万燈です。
日本はたちまち明るくなりましょう。　　（安岡正篤）

（参考文献）・雑誌「致知」2024 年 5 月号　鈴木正三に学ぶ勤勉努力の精神（小林誠）
・JOG（495）禅僧・鈴木正三 ～ 近代資本主義の源泉（伊勢雅臣）
・PHP 文庫　鈴木正三～現代に生きる勤勉の精神～（神谷満雄）
・幻冬舎　置かれた場所で咲きなさい（渡辺和子）
・アスコム　ルフィの仲間力（安田雪）